
Runaway Girl

Nayuta@001

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Runaway Girl

【Nコード】

N2408G

【作者名】

Nayuta@001

【あらすじ】

『彼女いない歴〃自分の歳』のオタクな俺の家に女子高生が転がり込んできた!? 『わ、私を泊めてください。何でもしますから!』

1・ホワイトクリスマス

「うお…さぶっ」

玄関のドアを開け一歩外に踏み出すと雪が深々と降り外は一面真っ白な雪に覆われていた。

「はは……初雪だ。地元ほどじゃないけど結構つもってるな。」

アパートの階段を滑らないようにゆっくり下り、通い慣れた駅までの道を歩き出す。吐く息は白く傘を持つ手は早くも冷たくなり、家の炬燵がとても恋しくなる。

「ああ、寒い…。何でこんな日に学校行かなきゃなんねーんだよ。」

一人口に出してグチってみるが学校に冬休みの課題を忘れなければよかった話で、誰でもなく自分のせいである。今年一年で見慣れた線路沿いの道も雪のせいで全く別の景色となっていた。

俺の名前は吉田祐樹。

今年からとある体育会系の大学に通っている一年生だ。趣味は…まあいろいろあるが、変わってるといえばオタクであるということだろうか。自分ではそれほど自覚してはいないが、一般人からすればやはりオタクに見えるのだろう。ちなみに彼女と言える存在は今までできたことはない。前に友達にこんな事を言われたことがある。

「祐樹ってさ人生の半分は台無しにしてるよな。」

と。別に俺の人生だからいいじゃんかと反論はしたが、今思えば確

かに一理あると思う。

などと脳内で自己紹介している間に駅に着いた。

「よお！祐樹。これから学校か？」

「ん？ああ、寺島か。ちょっとロッカーに忘れ物してな。」

改札口から出てきたのは同じクラスの友人、寺島悟だ。彼は陸上部に所属していて一回全国に行ったことのある猛者である。

「今日も部活があつたのか？」

「ああ。今日が今年最後の部活だったんだが雪のせいで大した練習はできなかったよ。」

「うへークリスマスだったのによくやるよ。」

「まあな。でも明日からしばらくオフだからな。サッカー部は結構早く始まるんだろ？」

「来年の五日からかな。」

「早ー！ぜんぜん休みねーじゃん！？…大変だな。まあ、がんばれよ。」

「おう。おつかれ。」

互いに手を振り寺島と別れ改札をくぐった。

2・ホワイトクリスマスの午後

「あー、だる。」

一時間近くかけて学校から忘れ物を取ってきた俺は再び駅の改札をくぐった。一時間前まで何も入っていなかった鞆には教科書やら私物やらでいっぱいになり俺の肩に重くのしかかる。

「相変わらず雪は降り続いたままか。…うお、さぶ。早く帰って炬燵に入る。」

止まった足を再び動かし駅から出る。それにしてもクリスマスだっというのに俺は何をしてるんだろうか。彼女がいれば違ったクリスマスを過ごしていたのだろうが、生憎生まれてからこの方彼女という類のものはできた試しがない。

「後で彼女のいなさそうな友達誘って鍋パでもするかな…。」

虚しすぎる(。(。

「よいしょっと…ん?」

アパートの階段を上り二階の通路に出ると部屋の前に見知らぬ女子高生が立っていた。黒い髪が肩まで伸びていて、顔立ちもなかなか女の子。そんな子が神妙な顔をして部屋のドアを見つめていた。

「キミ、俺の家になんか用？」

「え？あ・・・その・・・。」

「????」

どうしたのだろうか。彼女は両手でコートの裾ををきつく握り締め、下を向き、口を開けたり閉じたりしている。

「だ、だいじょうぶか？」

そう声を掛けると彼女は肩を大きく振るわせた。そして思い切ったように顔を上げ僕の方を見据え口を開いた。

「わ、私をしばらくこの家に泊めてください！」

「・・・・・・え？」

一瞬、彼女が何を言っているのかわからなかった。俺ってこんなブラグたつような事したっけ？

「いや、その…名前も知らない赤の他人だし。」

「お願いします。その・・・な、何でもしますから。」

「な、何でもって・・・。」

何でもという科白を聞いて思わず生唾を飲み込んでしまった。

相手は女子高校生。

しかもそれなりにかわいい。いや、普通にかわいいだろ。そんな子が『何でもしますから』なんて言ってきたら・・・。いやいや、落

ち着くんだ、俺！普通におかしいぞ。怪しいにおいがぶんぶんするぞ！昔からめんどくさいことには首を突っ込まないようにしてきた。ここはいつそ警察にでも突き出して・・・。

「あ、あの・・・。」

「いや、しかしな・・・。」

それ以上言葉は出てこなかった。彼女はまるで捨てられた子猫のようには震え始めたのだ。くそ。自分のお人よし加減に腹が立つぜ。俺はポケットから鍵を取り出し鍵穴に差し込んだ。

「ったく・・・。言っとくけど部屋は狭いし、めっちゃくちや汚いかな。」

「ほ、本当に・・・いいんですか？」

彼女の瞳には嬉しさからか涙がたまっていた。そんな顔されると断れねーだろうが。俺は無言でうなずき部屋のドアを開けた。

「あ、ありがとうございます！」

3・家の掃除は程々に

「…つくしゅん。」

家に入るなり、彼女は控えめのくしゃみをした。

「わるいな汚くて。少しほこりっぽいかもしれないな。」

「いいえ、少し外にいる時間が長かったから…。」

「ああ、確かにその格好じゃ寒いな。そうだ、先にシャワー浴びろよ。」

俺は風呂場を指さした。

「え？シャワー…ですか。」

「えーっと、別にやましい意味じゃないからな。君がシャワーを浴びているうちに部屋の掃除しておくから。お風呂焚くには時間かかるし、お湯がangan出していいからさ。」

「あの…その、着替えがなくて。」

「あー…、ジャージでよければ貸すけど？」

* * * * *

つてなわけで半ば強引に風呂場に追いやり、彼女がシャワーを浴びている間に掃除をしている訳だが、どうやったらこんなにも汚くなるのかねこの部屋は。

俺の部屋は六畳半の1Rアパートだ。家賃は三万五千元。その安さに目がくらんだ両親が俺の了承もなく勝手に契約してしまった。まあ、一人暮らしだし部屋の広さに文句はなかった。

だが、一つだけどうしても許せないことがあった。それは風呂がユニットバスということだ。風呂は狭いし、湯船にゆっくり浸かることもできない。一番の問題は風呂に入った後、湿気でトイレットペーパーが使い物にならないこと。これが一日や二日なら我慢もできるだろうが、後三年もこれだと思うとため息しか出てこない。

「よし。こんなもんかな。」

敷きっぱなしだった布団を片付けて周りに散らばってるゴミを一つにまとめて掃除機をかけた。本棚とゲーム機の周りは多少汚いがそこには目をつむってもらおう。

「台所も片づけたいんだが…やめとくか。」

部屋と廊下は一枚の薄いカーテンで仕切られている。今このカーテンを開けて彼女が風呂場から裸で出てきて『きゃー』なんて言われた日には一生癒えない心の傷ができそうだ。

…なんか落ちつかねえ orz

4・自己紹介

それから数分が過ぎ、彼女は風呂から上がり俺のジャージを着て部屋に入ってきた。

「おじゃまします。」

「お、あがったか。じゃあそこに座ってくれ。オレンジジュースと烏龍茶があるけどどっちがいい？」

「あ、お構いなく…。」

彼女をこたつの反対側に座らせて、客人用のグラスを取り出す。俺はそれにオレンジジュースを入れて彼女に差し出した。

「ありがとうございます。」

「さてと…、それじゃあ最初に自己紹介をしようか。えーっと、俺の名前は吉田祐樹。歳は19。大学の一回生でスポーツを専門に学んで…と簡単にこんなところかな。あー、あと趣味はただならすることと音楽を聴くこと。以上。」

「私の名前は二宮遥にのみやはるかです。高校二年です。趣味は…読書とウィンドウショッピングです。家出の理由は…その、今はまだ話せません。でもいつか必ずはなします。」

遥は『よろしくおねがいします』と言って頭を下げた。今の自己紹介を聞く限り、あまり活発な子ではないようだが。さて、どこから掘り下げようか。

「遥ちゃんね。いくつか質問があるんだけど、まず何で俺の家の前にいたの？」

「えっと、泊めてくれる家を探してこの辺をうろろしているうちに道に迷ってしまって…。そしたらパトカーが通ったのでどこかに隠れないとって思ってた近くにあったこのアパートに逃げてきたんです。」

「なるほどね。偶然隠れていたところが俺の家の前で、そこに俺が帰ってきたと。」

「はい…。」

なんてタイミングの悪いときに帰ってきたんだ俺は。

「…じゃあ次の質問。俺の家に…その、どのくらい滞在しようと思ってるの?」

「えっと…できれば…。」

おいおい。まさか一週間以上じゃないだろうな。

「その…一ヶ月くらい。」

「……………」

マジで。。。。

流石にそれは想像してなかったぜ。

「その、お金のことも何とかするようにがんばるので…。」

うーん…最近の女子高生はなめてかかると痛い目を見るようだ。簡単に部屋にあげてしまったはいいが、やがてはこの家に住み着いて俺の自由をことごとく奪っていくのだろう。そうなってしまっ

すべてが手遅れに！

しかし、ここで断ってしまつては男が廃る…。俺はどうすれば！？

「あのう…。」

「はっ！？すまん、ちよつと考え込んでいた。そうだな…一ヶ月置いてあげることが出来るかはわからないけど、できる限り配慮しようとは思つてるよ。」

現状を考えるとこれが最善の譲歩かな。人を騙すような子には見えないけど何があるかわからないしな。

「なにがともあれよろしくな。」

俺はそう言つて右手を差し出した。

「はい！よろしくお願いします。」

5・腹が減ってはなんとやら（前書き）

マイペースで書いているので更新が遅くなってしまいました。続けて読んでくださっている方、本当に申し訳ありません。

5・腹が減ってはなんとやら

ぐううう

「おおお…。」

遙ちゃんとの話も一段落しこれからどうしようと思っていた矢先、不覚にも自分の腹が鳴ってしまった。

「そ、そういえば腹へったな。」

時間は六時半。朝からなにも食べてないのでお腹が鳴るのも当然である。冷蔵庫にはなにも入っていないはずだし、インスタント系は一日の夕飯で底をついていたな。…ということは買い物に行かなくちゃ。今からデパートの食品売り場に行けばタイムセールの真っ最中かな。

「俺ちよつくら買い出しにいつてくるわ。」

「それなら私が行きます!」

「…その申し出はありがたいけどスーパーの場所わかるのか?」

「あ…。でも、でも。」

「まあまあ、そんなに行きたいなら次から行かせてあげるから。今日是一緒に行こう。な?」

「はい…。」

遙ちゃんはしょんぼりしてしまっただがそれはしょうがない。店の場所がわからないんじゃ夕飯の惣菜を買うことができないし、それに俺は俺で買いたいものがあるからな。

「そ、外寒いからそのクローゼットの中にある厚手のコート着ていけよ。あとは…電気は消したし財布と鍵はもった。ああ、ケータイ。」

財布と携帯電話を適当にポケットの中に入れて部屋の電気を消した。

「それじゃ行こうか。」

* * * * *

自分の家から一番近いデパートの食品売場に来たわけだが、さて今日は何を食おうかな。

「あ…」

「!?!?…どうしたんですか？」

「炊飯器の保温ボタン押すの忘れた。」

「……はあ。」

家に帰ったら電子レンジで暖めればいいか。

「よし。それじゃあ遙ちゃん、今日は出来合いの惣菜だけで終わりにしようと思ってるんだが何が食べたい？」

「えっと…何でもいいです。」

「う、うーん、それはそれでめんどくさいんだよな。よし、自分が食べたい惣菜を二つ選んでくれ。俺も二つ選んでおくから。それが今晚のおかずな。ちなみに嫌いな食べ物ってあるか？」

「…ピーマンです。あ、あとナスも。」

典型的だなあ。

「それじゃあ俺はほかの食材見てくるから選り終わったら俺の所まで持ってきてくれ。頼んだぞ。」

「は、はい。」

俺は惣菜コーナーから離れて今後必要になるであろう食材の買い出しに入った。チーズにベーコンにヨーグルト。この先一週間で食べそうなものを次々とかごに放り込んでいく。

それにしても、やっぱり女の子の子となると体のどっかに変な力が入るな。別に女の子は苦手じゃないけど…話してると上がっちゃうんだよな。今思うと女の子の手を握ったのは初めてのことかも…。

「俺って…。」

アホだよなあ

知ってたけどさ。

「あのう…。」

「え？」

声のする方を向くと遙ちゃん惣菜を持って立っていた。考え事をしていたせいか、隣に立っていた遙ちゃんに全く気づかなかった。

「ああ、惣菜選んできてくれたのか。サンキュー。」

「あの…やっぱり私迷惑でしょうか。今だって考え込みながらため息ついてましたし。」

うわ、ため息ついていたところ見られてたのか。しかもなんか勘違いされてるし。

「ち、ちがうって、別にそのことを悩んでたわけじゃないから。それに別に俺は迷惑だなんて思ってないし。ただなあ……」

「ただ？」

「その……本当に俺の家でいいのか？こころ辺は結構一人暮らしの奴が多いから探せば女の子の部屋も見つかるし……。あー、つまりだ、見知らぬ男と一つ屋根の下っていうのは色々とまずいんじゃないか？」

「そ、それって私が襲われちゃうってことですか？」

「……俺も一応男だしな。いつ間違いがおきて狼になるか」「大丈夫ですよ。」

遙ちゃんは笑って答えた。

「それにもう見知らぬ男の人じゃないですし。」

あー

下手に信じられても困るんだが

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2408g/>

Runaway Girl

2010年12月9日14時18分発行